吉元昭治著『圖說　道教醫學――東洋思想の淵源を學ぶ――』

池　内　早紀子

吉元昭治著『圖說　道教醫學―東洋思想の淵源を學ぶ―』を紹介したい。著者略歴によると吉元氏は一九五一年産婦人科醫として臨床の道に進み、以來針麻醉の研究、針灸の臨床など東洋醫學（中國醫學）もあわせた醫療を多年にわたり實踐されてきた。紹介者池内は藥劑師で漢方藥局での實地經驗があり、鍼灸の免許も有している。私が、吉本氏の名を知ったのは、東洋醫學の臨床に關する書籍だった。一方で著者は、はやくから東洋醫學と道教の關係に注目して、一九八九年に『道教と不老長壽の醫學』を上梓し、「「フィールド的な努力」により「民間療法のかたちとなっている」ような情況から「過去にさかのぼって、全體を把握」したと述べている。つまり、現在の醫療のありかたを文獻的に檢證しようとしたのである。しかし、著者は「「道教醫學」というからには、『道教經典』より抽出、分類、整理すべきであるが、これらについては、後日稿を改めるつもりでいる」とも述べ、道教醫學というタイトルにもかかわらず、『道教經典』への言及が少ないことを憂慮していた。『圖說　道教醫學―東洋思想の淵源を學ぶ―』は、まさに三十年後、研鑽の末に「稿を改めた」ものとなっている。

以下、目次をもとに、内容を概説したい。

「はじめに」

最初に著者は、生死の問題のうち「死の問題は宗教」が、「生の問題は醫學」が主るという。そして中國において「生を追求した醫學は道教」なのだという。これが著者の考える「不老長壽の醫學」「道教醫學」ということだろうか。さらにこれは「道家を中心とした自然觀より發展した」のであるから、この「思想、宗教と醫學の共通根を見極めて大樹を眺める必要がある」でなければ「枯死」してしまうという。評者も鍼灸學校の教員に「どうして鍼灸（東洋醫學）と道教が、關係があるのか」といわれ違和感を感じた經驗がある。現代、科學的エビデンスを持たない醫學は醫學として認められず、醫學と宗教はまったく別物と考えられているからだろう。一方古來より（新規の）感染症が蔓延したとき、人は大きな力を持たなかった。科學的エビデンスを第一義にいう現代醫學が手詰まりなことを思うとき、評者は著者の「宗教と醫學の共通根を見極めて大樹を眺める必要がある」という言葉に耳を傾けたい。

［本文篇］

一、歴史と文明

著者は、「人が病氣になったり死んだりするくりかえしが歴史の集積となる」そこで、「醫學の創まりを見るにはまず歴史から」なのだと述べる。この章では裴李崗文化・仰韶文化・他の古代の文化をとりあげ、つづいて盤古、有巢、燧人、伏羲をはじめとする神話・傳説を、さらに時間的な流れ、地理をごく簡單に説明している。

二、自然觀

中國の「生を追求した醫學」は、その「自然觀より發展」したということから、まず「天地人」について解説し、その後中國古典から「天地人」に關するトピックを抜き書きしている。

三、平衡理論

四、陰陽説

五、五行説

「五行説」に變遷があることを取り上げ、さらに各家の五行説として『管子』・『周禮』他における「五行説」の記載を檢討している。

六、易・干支

十干・十二支などの用語の説明をした後、「醫易同源」「運氣説」などに觸れる。『周易參同契』をあげ、「易の思想をかりて煉丹（內丹）の法を説いている」とし「「醫易同源」のよい手本になる」という。また「運氣説」では唐の王冰が『黃帝內經素問』に編入した「運氣七篇」などの名をあげるが、ここでの記述のみでこれらを理解することは難しいだろう。

七、諸子百家

『老子』『列子』『莊子』「黃老思想」『呂氏春秋』『淮南子』『論語』などより拔き書きしている。內容はやや散漫となっているように見える。ただし著者は、この章のまとめで「「老莊」的な思想は、諸子百家時代以降、醫學的思想・哲學の中にちりばめられている事を强調しておきたい」と述べている。

八、古典類等の文獻

中國古典群にある醫學や宗教思想に共鳴する部分を抽出・整理し全體として把握する必要があると指摘し、ここでは馬王堆漢墓出土の『五十二病方』と『山海經』の二書より抽出している。

九、道教と道教醫學

九-一、道教

道教に關連する資料・工具書なども紹介しているのが特徵的である。

九-二、道教醫學

ここからが、本書の本題である。この項では後の［圖版篇］に揭載される表を用いた説明が多い。例えば「迷信から科學に」「創生から道教へ」「道教のなりたち」「道教の構造」などと名づけられた著者自作の表なのであるが、これらを理解する

ためにはもう少し詳細な解説があればと思う。その他の「神仙説」「三尸説」「道士、醫師」「醫藥神」などの細目の解説は丁寧である。

十、『道藏』の醫學的部分

道藏より醫學的と思われる記述を抽出し、次の三項目に分け記載している。〈ここは後ほど詳細に取り上げたい。〉

十一、湯液・處方

十二、本草

十三、鍼灸

十一、道教醫學を支える古典、經典

「道教と醫學の中間にあって、雙方の二面性を持っている」もののうち特に重要な書として『抱朴子』『太平經』『黄庭經』を取り上げ簡明な解説を添えている。

十二、符・圖・籤・呪・善書

「道教醫學と現在の民間信仰・民間療法とが結びつけられているものに符（おふだ）、圖、籤（おみくじ）、呪（祈禱）がある」としてこの章で取りあげている。また印刷頒布するのが善行とされる「善書」についても簡單ではあるが取り上げている。

［圖版篇］

［圖版篇］では［本文篇］の一章～十二章に對應して分類され、それぞれの表や圖が掲載されている。

附錄「道藏」等中國醫學關係經典索引

（紹介者注、圖版篇に三、平衡理論に對應する箇所はない。）

總括してみよう。本書は前半の本文篇、後半の圖版篇より構成される。本文篇は內外の資料を涉獵した豐富な內容が要領よく細目化されている。またその項目は多岐にわたり、百科事典としても使える。前半の本文に插入される圖表番號が、後半部の圖版にリンクされ、それを參照することにより本文の理解を深めるように纏められており、讀みやすく工夫されたレイアウトとなっている。

圖版篇は道教經典や古書からの圖版などに加え、著者が作成したチャートなどの圖表が載る。少し殘念なのは圖版のなかには、依據するところが自著になっているものがある點である。また典據の表示がやや雜な點、最近の研究動向の反映がない點は、中國文獻學專門の研究者には、些かもの足りなく感じられるだろう。しかし著者が「はじめに」で述べるように「醫學、醫療にたずさわる人、いわゆる東洋醫學に關心をおもちの方、もしくは、すでに日常診療で活躍されている方」に「中國醫學の根底にあるものが何んであるのかを分っていただきたい」という目的には充分すぎる內容となっている。專門家が求める文獻的な內容を盛り込むことは、かえって煩雜になり、本來の目的から遠ざかる可能性がある。

簡にして要を得たこの書は、これから道教の醫學を研究しようとする人が、必ず參照しなければならない基本的な書物となっている。著者の長年の研究の成果であるこの著は、多くの讀者に裨益するであろう。

著者は臨床醫としての立場から「正統道藏」「續道藏」あわせ五四八五卷といわれるこの厖大な道教の資料にすべて目を通し、醫學に關する記事を摘錄し、この書籍を作り上げている。著者は「『道藏』については、道教の研究の第一資料であるが、これを通讀するには腦力以外に氣力、體力も必要になる。筆者はかつて、五年をかけて二回ばかり通讀し、その中から醫學的關係部分を抽出し、プリントし二二冊の私製『道典』をつくった」という。

本書の「道藏の醫學的部分」には一、湯液・處方、二、本草、三、鍼灸の三部に分け實際の醫學的內容の例をあげている。ここにやや繁雜になるが實際に吉元氏がどのような書籍に着目したのかを示すために、とりあげた書籍の名前をあげてみたい。「　」內注は紹介者による。

一、湯液・處方には、（一）還丹衆仙論、（二）修眞十書、（三）修眞精義雜論、（四）太上靈寶五符序、（五）黃帝太一八門逆順草生死訣、（六）四氣攝生圖、（七）圖經衍義本草、（八）枕中記、（九）神仙服食靈草菖蒲丸方、（一〇）太清經斷穀法、（一一）太上肘後玉經方、（一二）

三元延壽參贊書、（一三）太清金闕玉菜仙書八極神章三皇內祕文［太清金闕玉華仙書八極神章三皇內祕文］、（一四）太上除三尸九蟲保生經、（一五）至言總、（一六）大玄寶典［太玄寶典］、（一七）上清子金丹大要妙用［上陽子金丹大要？］、（一八）洞元靈寶道學科儀［洞玄靈寶道學科儀］、（一九）三洞珠囊、（二〇）孫眞人備急千金要方、（二一）急救仙方、（二二）上清明鑑要經。

二、本草には（一）茅山志、（二）仙都志、草木、（三）太極眞人雜丹藥方、（四）三洞珠囊、（五）孫眞人備急千金要方、（六）上清明鑑要經、（七）三洞道士居山修鍊科、（八）上清太上帝君九眞中經、（九）太上靈寶柴草品［太上洞玄靈寶芝草品］、（一〇）雲笈七籤（方藥部、卷七十五）、（一一）雲笈七籤（方藥部、卷七十七）、（一二）（道藏輯要）長生胎元神用經、（一三）（道藏輯要）［孫眞人備急千金要方］論處方第五、論用藥第六、（一四）（雲笈七籤）孫眞人千金方。

三、鍼灸には、（一）修丹妙用至理論、（二）修身十書諸雜著指玄篇［修眞十書雜著指玄篇］、（三）抱一子三峯老人丹訣［抱一子三峯老人丹訣］、（四）靈劍子引導子午記、（五）四氣攝生圖、（六）太清神黃眞經、（七）三洞樞機雜說、（八）淵源道妙洞眞經、（九）易外別傳、（一〇）眞誥、（一一）道樞、（一二）黃帝素問靈樞集註、（一三）黃帝內經素問遺篇、（一四）玄珠密語［素問六氣玄珠密語］、（一五）黃帝八十一難經註藏圖序論［黃帝八十一難經注義圖序論］、（一六）黃帝八十一難經纂圖分解［黃帝八十一難經纂圖句解］、（一七）至言總、（一八）孫眞人備急千金、（一九）急救仙方、（二〇）上清靈寶大法、（二一）太上助國救民悠眞祕要［太上助國救民總眞祕要］である。

誤字が散見されるが、これまであまり注目されることがなかった書物も取り上げており大變參考になる。例えば「湯液・處方」と「鍼灸」の兩分類で取り上げられている『急救仙方』は、產婦人科、整形外科等の外科的治療、癆病（結核に相當すると言われている）に關する內容が編纂されている。癆病に關する記述は、卷十「上清紫庭追癆仙方論法」「總論傳癆蘇游論」「癆療諸證浴法」

「守庚申法」「修合藥法」「醫傳屍方越王文」「論已試功效」、巻十一、「上清紫庭追癆仙方品」「黄帝灸二十一種癆圖并序」である。ここには、日本の中世以降の鍼灸流儀書に共通する記載があると考える。つまり日本の中世以降の鍼灸史を考える上でも大變重要な資料となるであろう。

また本書［圖版篇］、「圖表一三二　傳屍蟲の變傳」の蟲の圖は、書中に明示されていないがこの『急救仙方』巻十の文中に見られる一八種の蟲の圖である。これらの蟲は氣血が凝結して生じ、初代は嬰兒、鬼、ガマガエルなどの姿で、六代に渡りムカデ、エビ、アリ、ハリネズミ、ヘビ、ブタの肺、馬の尾、スッポンなどのさまざまな姿を變えて人の體内に寄生し、「傳屍癆瘵」をひきおこすと考えられている。紹介者である私も取り上げたことがあるが、これと全く同じ圖が鎌倉時代の醫書である梶原性全『萬安方』一三二七年に記載されている。このことからも道教醫學が日本の醫書に取り入れられていたことが推定できる。だが、これまでそのことに注目した研究はなかったように思われる。今後本書の「道藏の醫學的部分」を再確認することは大變意義深い。

附け加えて著者のいう「私製『道典』」を參考にして「『道藏』等中國醫學關係經典索引」を作成し、本書巻末に附錄として掲載する。これは『道藏』等の中から中國醫學に關係する經典を以下の三三項目、（一）湯液・處方、（二）本草、（三）鍼灸、（四）外丹、（五）内丹、（六）調息、（七）導引、（八）却穀・食餌、（九）房中、（一〇）養生、（一一）符、（一二）圖、（一三）占、（一四）籤、（一五）呪、（一六）齊、（一七）禁、（一八）精氣神、（一九）氣、（二〇）運氣、（二一）解剖學、（二二）身神、（二三）醫科、（二四）三尸說、（二五）血湖說、（二六）產婦人科、（二七）外科、（二八）文學、（二九）道教醫學、（三〇）道教理論、（三一）神仙、（三二）神枕、（三三）用語・字句に分類し、經典それぞれの「道藏册No.」「道藏頁」「提要No.」「經典名」を表記している。すでに朱越利『道藏分類解題』一九九六年のような書物もあるが、これもまた有用な資料となるだろう。

これまで「道教」を「醫學」の視點から觀測するような書籍は日本では出版されていなかった。中國社會科學院には道教醫學を研究する李貴海氏がいる。現在、北京白雲觀に、道教醫學の診療所があり、昨年、彼の紹介により長い髪を束ね髷にした六十前後の道醫の診察を受けることができた。ここでの診察は通常とは少し異なる脈診法によるもので、「孫思邈の脈診」とのことであった。また机上には『千金要方』が置かれていた。この診療所が開かれたのはそれほど古くはないようであるが、特徴のある道教醫學が實踐されているようであった。中國では、すでに道教醫學の研究者がおり、研究をすすめている。道教醫學の中には現在の東洋醫學が篩いおとしてしまった、さまざまな重要な觀點が含まれているように思われる。著者の示した様々な文獻を手がかりにして、道教醫學の研究が進むことを期待したい。

最後になったが、著者が令和二年九月二十九日に永眠されたことを知った。臨床醫療に從事する傍ら、厖大な資料を收集し、生涯をかけて本著を編纂された。吉元昭治先生のこれまでの數多の業績に贊辭を呈するとともに、心よりご冥福をお祈りしたい。

（A4判、五一二頁、勉誠出版、
二〇一八年十月、税込五五〇〇〇圓）